

4-1 ヒト体内に見出される窒素化合物とその前駆体のアミノ酸の組合せである。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) γ -アミノ酪酸 (GABA) ————— メチオニン
- (2) ノルアドレナリン ————— トリプトファン
- (3) 尿酸 ————— アルギニン
- (4) チロキシン ————— チロシン
- (5) クレアチン ————— グルタミン酸

4-2 中心静脈栄養法に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 長期間の投与には適さない。
- (2) クロウン病の寛解期に用いる。
- (3) 2,000 kcal / 日以上エネルギー量が投与可能である。
- (4) 呼吸性アシドーシスが起こりやすい。
- (5) ビタミン B₁₂ 欠乏に注意する。

4-3 糖尿病に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 血清 1,5-アンヒドログルシトール (1,5-AG) 値は、上昇する。
- (2) 体重増加は、典型的症状である。
- (3) 指示エネルギー量は、{標準体重 (kg) × 身体活動量 (kcal / kg 標準体重 / 日)} で算出する。
- (4) 指示たんぱく質量は、1.5 g / kg 標準体重 / 日とする。
- (5) 糖尿病ケトアシドーシスでは、速やかにグルコースを経口補給する。

4-4 炎症性腸疾患に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) クロウン病の活動期で重症の場合には、成分栄養剤による経腸栄養法を行う。
- (2) クロウン病の寛解期には、成分栄養剤と日常食を組み合わせた食事療法を行う。
- (3) クロウン病における脂質摂取量は、50 g / 日程度とする。
- (4) 潰瘍性大腸炎の活動期で重症の場合には、消化態栄養剤による経腸栄養法を行う。
- (5) 潰瘍性大腸炎の寛解期には、水溶性食物繊維の摂取を制限する。

4-5 「動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2012 年版」(日本動脈硬化学会) に示されている動脈硬化性疾患予防のための食事に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 脂肪エネルギー比率を 15 ~ 20% とする。
- (2) 食塩の摂取を男性 9 g / 日以下、女性 7.5 g / 日以下とする。
- (3) コレステロール摂取量を 200 mg / 日未満にする。
- (4) n-3 系多価不飽和脂肪酸を制限する。
- (5) 飽和脂肪酸をエネルギー比率で 10 ~ 15% とする。

4-6 52歳、男性、営業職。身長175cm、体重60kg、血圧160/95mmHg、糸球体濾過量（GFR）80mL/分/1.73m²、尿たんぱく量0.2g/日であった。この患者の栄養基準の組合せである。正しいのはどれか。1つ選べ。

エネルギー (kcal/kg 標準体重 / 日)	たんぱく質 (g/kg 標準体重 / 日)	食塩 (g / 日)	カリウム (mg / 日)
(1) 25 ~ 35	制限なし	10未満	制限なし
(2) 25 ~ 35	制限なし	6未満	制限なし
(3) 25 ~ 35	0.8 ~ 1.0	3未満	制限なし
(4) 35 ~ 45	0.8 ~ 1.0	6未満	1,500以下
(5) 35 ~ 45	0.6 ~ 0.8	3未満	1,500以下

4-7 内分泌疾患に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 甲状腺機能亢進症では、水分摂取を勧める。
- (2) 甲状腺機能亢進症では、ヨウ素摂取を勧める。
- (3) 甲状腺機能低下症では、エネルギー代謝が亢進する。
- (4) クッシング症候群では、高エネルギー食とする。
- (5) クッシング症候群では、カルシウムを制限する。

4-8 慢性閉塞性肺疾患（COPD）に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 大気汚染はリスクファクターとならない。
- (2) 消費エネルギー量が減少する。
- (3) 食欲不振がみられる。
- (4) クスマウル大呼吸がみられる。
- (5) 脂質制限が有効である。

4-9 小児疾患に関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 小児ネフローゼ症候群では、副腎皮質ステロイド薬療法が有効である。
- (2) 小児1型糖尿病では、炭水化物エネルギー比率を35 ~ 40%とする。
- (3) ゴーシェ（Gaucher）病では、銅が細胞内に蓄積する。
- (4) メープルシロップ尿症では、チロシンを添加する。
- (5) フェニルケトン尿症では、分枝（分岐鎖）アミノ酸の摂取を制限する。

4-10 食物アレルギーに関する記述である。正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 食物アレルギーは、アレルゲンの経口摂取時のみに起こる抗原抗体反応をいう。
- (2) 新生児期には起こらない。
- (3) 原因食品を多量に摂取しなければ起こらない。
- (4) 仮性アレルギーは、免疫反応を介さずに発症する。
- (5) アレルゲン活性は、食品の加熱で完全に失活する。

次の文を読み「4-11」「4-12」に答えよ。

32歳の経産婦。事務職員。身長160cm、生来健康。父に糖尿病がある。妊娠26週0日の健康診査の結果は、体重58kg（非妊時体重53kg。前回健康診査日より+0.8kg）、血圧124/70mmHg、尿たんぱく（－）、潜血（－）。血清尿素窒素14mg/dL、クレアチニン0.8mg/dL、眼底に異常はなく、浮腫も認めない。75gブドウ糖負荷試験：静脈血前値112mg/dL、1時間値202mg/dL、2時間値185mg/dL。ヘモグロビン11.8g/dL、ヘマトクリット37%、平均赤血球容積（MCV）91flであった。「おなかもだいが大きくなってきて、1日に2、3回軽くおなか張ることがありますが、痛みも出血もありません」と話している。

4-11 今回の健康診査のアセスメントで適切なのはどれか。1つ選べ。

- (1) 妊娠高血圧症候群
- (2) 妊娠貧血
- (3) 急性腎不全
- (4) 切迫早産
- (5) 妊娠糖尿病

4-12 この経産婦について正しいのはどれか。1つ選べ。

- (1) 栄養指導では、食塩の目標量は1日9.0g未満にする。
- (2) 栄養指導では、鉄を含んだサプリメントを積極的にとるようにする。
- (3) 栄養指導では、ビタミンB₁₂の摂取を控えるようにする。
- (4) 神経管閉鎖障害は、この経産婦の胎児に発症するリスクの高い疾患である。
- (5) 巨大児分娩のリスクがある。